

年間テーマ：上杉家歴代の文書管理と歴史編纂

期間テーマ：定勝と軍事の先例 5月25日（木）～6月27日（火）

資料名	頁数	法量 (cm)	時代	番号	所蔵
複製 国宝上杉本洛中洛外図屏風	六曲一双	各160.4×365.2	原本 室町～桃山 (16世紀)	複製B	上杉博物館
国宝 上杉家文書 (赤筆笥乾六之段ツ印) 1 千坂高信書上	1通	33.3×180.8	(年未詳) 正月17日	966	上杉博物館
国宝 上杉家文書 (黒塗掛硯箱一之段) 2 上杉定勝古案集	1冊	18.0×13.0	寛永11年(1634)6月24日条	1754	上杉博物館
上杉文書 3 「就御上雒御貯金銀渡方之帳留」	2冊	32.4×24.0	寛永11年(1634)12月13日	690 -2・3	上杉博物館

上杉文華館では、国宝上杉本洛中洛外図屏風（原本または複製）とともに、「上杉家文書」を毎月入れ替えながら常時展示しています。上杉家文書は、江戸時代以降に行われた文書の管理や歴史編纂を通じて、中世以来の上杉家の由緒や権威、特定の当主の事績を示す文書が収集、選別され、移動や変化を続けながら、現在の構成（2018通、4帖、26冊、保存容器として両掛入文書箱、精撰古案両掛入文書箱、黒塗掛硯箱、赤筆笥 乾・坤2棹、附として歴代年譜325冊）になったことが明らかになっています。

また、「上杉家文書」とは別に「上杉文書」と呼ばれる藩政文書を中心とした1万点弱の史料群があり、米沢市では令和3年度から文化庁の「地域活性化のための特色ある文化財調査・活用事業」の補助を受け、調査に取り組んでいます。その中核は文書管理や歴史編纂を担った、江戸時代の御記録方や、近代の上杉家記録編纂所総裁伊佐早謙の関連文書です。上杉文書には、国宝「上杉家文書」を深く理解するための手がかりが、豊富に含まれています。

今年度は本調査事業の成果を活用して2つの史料群を紐解きながら、江戸時代から近代にかけて、文書の具体的な管理方法と歴史や記録の編纂事業、その背景にある藩政の状況や世情をご紹介します。永年にわたり文書を守り伝え、活用してきた人々の営為にご注目下さい。

〔定勝と軍事の先例〕

上杉定勝は慶長9年（1604）に生まれ、元和9年（1623）に父景勝の死去により第2代米沢藩主となります。正保2年（1645）に没しました。三代将軍徳川家光のもとで江戸幕府の制度が確立していく時期にあたり、定勝は米沢藩の職制の基礎を作りました。合戦は無くなる一方で、後述の上洛供奉や寛永20年（1643）の加藤家改易に伴う会津城請取といった軍事動員が行われ、その後の先例となっていきます。

今回は、幕府が大名に課した軍役に注目し、特に定勝の上洛供奉に関する文書を取り上げます。徳川家光は元和9年（1623）、寛永3年、同11年と3度上洛しました。上洛によって朝廷への統制を強化するとともに、寛永11年には諸大名に命じて総勢三〇万人以上の軍勢を動員し、将軍の権威を示しました。定勝はいずれも供奉を命じられ、軍勢を率いて上洛しました。

上杉文書には、定勝の上洛供奉に関する交際記録の日記、行列図、経費計算の帳面などの原文書がいくつか残されています。寛延3年（1750）完成の定勝の年譜にもこれらの記録の概要が収録されており、編纂の参考資料となったようです。これらの記録は文久3年（1863）に行われた、次の上洛供奉に際しても先例として参照されました。

一方、国宝「上杉家文書」では、黒漆塗掛硯箱に定勝関連の文書がまとまって保管されています。「古案集」（資料2）の他、定勝が軍事と文芸を学んだことを示す冊子類が中心となっています。